

茨城国体視察報告

報告者 池谷 孝（指導者養成委員長、清水エスパルス）

初めに

今回は国体の歴史と静岡が成し遂げてきた成果に触れながら茨城国体を見てみます。

国体の歴史と静岡

1946年に始まった国体では、単独チームとして1957年に藤枝東、58' 清水東、66' 藤枝東が優勝した。1970年、選抜大会となると、同年の埼玉との両県優勝を皮切りに、91' から94' までの4連覇を含み、選抜移行後の優勝だけでも全国を19回制覇した。

U18の選抜大会は各県の育成のレベルを象徴するものであり、全国の選手のスカウティングの場でもあった。静岡県は他大会と合せて圧倒的な育成と勝利の成果を収めてきたと言える。4種、3種、2種の育成の成功である。

2005年のU16化に伴い様相は一変した。ジュニアユース年代との協力体制、一貫指導が言われ、選手層も中体連・高体連からJクラブ育成選手の割合が徐々に増え、U17代表の世界大会出場にも結びついていった。逆の観かたをすると、教えられることで技術の平均点は上がったが、学校部活出身の荒削りな個性派選手がいなくなったと言えるかもしれない。

U16化以降しばらくの間、人口や移動の利便性など有利な条件を備えた関東圏、関西圏の選抜チームが優位に大会を支配したが、近年はその勢いもやや沈静化した印象を受ける。静岡は2011年千葉と両県優勝を果たし、2019年の今年ようやく単独で茨城国体を制した。

私にとっては、1992年山形国体で岡田監督と共にコーチとして優勝させたが、勝っても憤怒に満ちた大会だった(笑)。96' 広島で監督として優勝した時は「これでやっと帰れる」という安堵しかなかったと記憶している。当時はそれだけさまざまなサッカー関係者やメディアの「優勝して当たり前、準優勝は一回戦負けと同じ」というような圧力が大きかった。実はそれが逆に、私たちのやる気と野心に火をつけたのであるけれど。

茨城国体

そういう意味では、時代の雰囲気も変化した今、村下監督率いる静岡選抜の優勝は、選抜を指導した人たちにとって本当にうれしく達成感のある優勝だったと思う。村下監督の野心を持った謙虚な学びと成長、チームづくりの成功のもたらした果実でもあった。

大会全般としては、私が見たいいくつかの試合の中では、鹿児島を除き、特徴ある選手やチームが少なかったように思えた。勝敗に影響を与える特徴を持った個の不在が見えた。

細かい分析・報告は当事者のスタッフに任せるが、静岡選抜チームは、初戦こそ守備のぬるさが言われ、東海予選2回戦と同様の試合運びの拙さが見えたが、2回戦以降徐々に選手が成長し、自信を深めていったように思う。2回戦は守備の1STディフェンダー、2NDディフェンダーの守備と運動に課題を見たが、その後は試合ごとに整っていったように見えた。男子三日会わざれば刮目して見るべし、の諺通り、勝ち進むことによってわずか数日で可能性ある選手たちが成長していく典型だと思う。

2005年以降、選抜監督の若返りが進む中、今回の優勝は、その選択がある意味正しいものであるという答えを出した瞬間でもあったように思う。

これまでの先人の積み上げがあってこそこの国体ということを念頭に置きながら、次に続く監督スタッフには、責任や感謝の念と共に、選手の選考、スタッフ選考、チーム構築の正しい理論と根拠、アートなフィーリングとシンプルさ、そして野心とエンジョイメントを持って頑張ってもらいたいと思う。

最後にあらためて、村下監督はじめ、鈴木啓史コーチ、石井 YD などスタッフの方々たいへんおめでとうございました！